# 何でもないものの発見
## ～チッタスロー（地産地消）で地域力を引き出す～

法政大学教授　陣内　秀信

どうもこんにちは。私は、ミツカン水の文化センターに本当に長くお世話になっていまして、開設当初からずっと色々協力させて頂きました。時代を先取りしたテーマといいますか、いろいろなことを手掛けて社会的に評価されていることを、非常に嬉しく思います。

今日のテーマも、最初誰が言い出したのでしょうか、アクアツーリズム。なかなかいいテーマだと思います。「里山」に対して「里川」ということも、ミツカン水の文化センターの一つの重要な柱として提唱していまして、私はもっともっとそれを使って頂きたいと思っています。このペアで、これからさらに水の重要性、人にとっての大切さを訴えられればと思います。

### イタリアでのチッタスローの動き

考えてみると、自分自身、学生時代に留学して勉強していたベネツィアは、アクアツーリズムの権化にあるところで、観光と水が結びついている訳です。ただツーリズムというのは、色々あると思うんです。自律的ツーリズムというお話がございましたけれども、よく聞かれるのは、「いったいベネツィアにおいて観光は、経済の収入のうち、どれくらいを占めているのか」ということを聞かれますが、誰もわかりません。どこまでが観光なのか、わからないわけです。そして、リピーターがすごく多い。そして郊外にセカンドハウスを持つ、田園にセカンドハウスを持つだけじゃなくて、ベネツィアの中にセカンドハウスを持って、世界中からみんな来る訳です。

そして本当に色々文化的な催しものがあります。コンベンションシティになります。ベネツィア・ビエンナーレにも人を集めます。このように、ツーリズムというのは非常に広い概念だと思います。

今日お話をしたいツーリズムは、大勢の人をひきつけるものではなく、リピーターが多い。生活の延長上に行ってみたくなる。しょっちゅう行って、新しい催し物に触れたり、美味しい季節のものを地産地消で食べる。そういう日常の延長上のツーリズムです。それは当然、今石森先生のお話にもありましたけれども、まちづくりにつながります。

イタリアでは、1980 年代に田園が見直されるようになり、アグリ・ツーリズムも出てきました。アグリ・ツーリズム法が制定せれたのが、1985 年です。田園の風景を大切にする風景法も 85 年です。本当に皆、都市と田園へのつながりをもう一度作り直すというのが 90 年代以後の 2000 年代の動きになります。

そしてスローフードがイタリアから発信され世界中に広がり、さらにスローシティ、チッタスロー、なまってチッタズローって言います。それがイタリアの動きを表しています。

“何でもないもの”へ注目するということは、日本でもかなり共有できるようになって来たと思います。観光も、一級のお寺や神社や宮殿があるところではなく、“何でもないところ”へ行って楽しむ。自分で発見する。その面白さを、私はベネツィアに留学した時に教わりました。

何でもないものへの眼差し　価値付け　ヴェネツィアから始まる

ヴェネツィアはどの街角も面白い、絵になる、マイナーなものほど美しい

私は、もう亡くなって随分経つ方ですが、エグレ・トリンカナートという大変すてきな先生に習いました。だいぶお年ではありましたが、大変美しい方で、私もぞっこん惚れこんでしまいました。彼女は 1947 年に「ヴェネツィア・ミノーレ」という本を書いて、何でもない建物のスケッチ(平面図、立面図、パース)を全部描いて、本当にベネツィアの何でもない建物を何十棟、何百棟と調べて、見事に普通の風景を評価したのです。当然水際の建物もいっぱいあります。

そして、そういうものが評価されるように本当になったのは、70 年代以後だと思います。日本のディスカバー・ジャパンも 1970 年です。あの時も海のある神戸、函館、長崎、横浜、そして川や堀、用水路がある金沢が取り上げられましたので、アクアツーリズムは既に入っていたと思います。

## 歴史的なまちの再評価

例えばトレヴィーゾは、本当に何でもない町で、観光都市ではありません。掘割がいっぱいありまして、本当に清らかな水の流れで、生活空間として非常に優れていて、どんどんこういう古い町を再生する。歩行者空間化して、ヒューマンスケール化の良さを取り戻した。なんてことのない水辺です。こんな水辺、日本にはたくさんあります。それから城壁の上は、もう城壁が要らなくなったので、プロムナードにしていて、水車が保存されています。ここは本当に生活感があって、グルメ文化なんです。そして周りにベネトンが登場するなど起業家精神が旺盛で、多くの国で都市が評価された時代に、イタリアでは地方都市が評価されたのが 80 年代で、そこでデザインやファッションの都市型文化が出て来た訳です。イタリアが底力を発揮して、日本でもアルマーニやティラミスのようなイタリアブームが起こりました。これは、こういう都市が非常に良かったからです。

その次のステップで、80 年代のある段階から、田園が評価されるようになります。例えば、「ちょっと気取ってお食事に」という時には、車でちょっと行った郊外の農場を改装したようなレストラン。これが、すごく人気なのです。

その次のステップで、田園部や田舎に住む人が増えて来る。まさにそれが 80 年代から起こりまし

た。トスカーナは、最初はイギリス人やフランス人が注目しました。イタリア人は、まだ移民していたのですが、空き家や廃屋になりかかっていたものを、フランス人やイギリス人、先に豊かになった人達が注目してくれた訳です。それによって「あ、そうか」「自分のところ、いいじゃない」と皆目覚めてくる訳です。こういう小さな町や村が非常に人気になる。

1985年に風景法が出来て、「田園や海岸線を守る」といった都市の景観だけを保護する以外の動きが出て参ります。そしてこれが、世界遺産になりました。フィレンツェあたりで絵葉書を見ていると、ある段階から題材が変わって来たのです。70 年代まではパラッツォ、要するに立派な建築家が作った都市のモニュメントあるいは広場、それから芸術作品でした。ところが 80 年代頃から、こういう風景を切り取った写真が絵葉書になった。これは、私は面白いなと思って見ていました。トスカーナの何でもない風景。糸杉、オリーブ畑、緑があって、ところどころ農場がある。「何でもない」、「あちこちにあった」、「皆が気づかなかったものがいい」という意識が 80 年代に出て来た。これがアグリ・ツーリズムにつながります。

シエナ周辺では、5 つの小さな自治体が連合して調査をして、価値付けをしました。この中にも人間が作り上げた歴史的なレイヤーがいっぱいあります。ですので、都市の中に歴史的なエレメント(要素、構造)があるのを認識したのと同じように、田園にもそれをやりました。それをドキュメンテーションして、ユネスコに申請して、登録されました。

## 自然・田園の再評価(アグリ・ツーリズム)

最近では美しい風景のもとでとれたワインは美味しいという感性がある。これはすてきなことだと思います。シチリアには素晴らしい、世界遺産級の塩田がありますが、そこも美しい風景です。そこで出来た塩は美味しいと言われています。

実際、このあたりの農地は地価が上がっています。ガストロノミーヤという食文化が今、地域おこしのキーワードになっていて、美味しいものをすてきな場所で食べる地産地消。こういう中から、スローフードというのが、北のブラから出て来て、世界中に広がった。そして正真正銘の本物の料理が、地元で取れた農業生産物、加工品として食べられる。アグリ・ツーリズムは、イタリア北部で発生して、トスカーナで広がって、今シチリアやサルデーニャなど、南イタリアも全部に広がっています。

去年、ビチェンツァ近郊でのアグリ・ツーリズムに参加しました。ボロボロの廃屋に近い農家を見事に蘇らせて作り上げた家族経営のアグリ・ツーリズム。このようなものがたくさんあって、農業は衰退していたのですが農業・農村のイメージが、これでずっと上がりました。それでも経営は、なかなか大変ではあります。そこで食材の 51%以上を、自分のところで取れたものを使わなければならない。それを守っていれば、税制の優遇措置があり、非常に経営が楽になります。そうやって政府がサポートしています。最近は B&B（ベンド・アンド・ブレックファースト）的に田園に作られるものもあります。

“都市の中の、さりげない場所の発見”ということからすると、ミラノの人気スポットであるナビーリオがあります。これはまさにアクアツーリズムで、運河です。レオナルト・ダ・ビンチが、「ミラノを水の理想都市にしよう」という構想をスケッチに残しているんです。元々水が循環する都市でしたが、そのロックゲートの改良版を、レオナルド・ダ・ビンチがスケッチで残しています。それと似たようなものが、今でも部分的に残っています。

しかし、日本と同じように近代にほとんど埋めてしまい、3 系統くらいしか残りませんでした。そこでミラノの人達は頑張って、残っている運河を 30 年以上かけて再生しました。そして 90 年代に入る頃には、人気スポットになっていました。東京や大阪はもっと残っているので、もっとやれる筈ですね。

このように色々なものに運河を活用していますが、舟運は未着手なのです。今度ミラノで万博があり、それを目指して舟運を回復する大きなプロジェクトを考えているそうです。さりげない、何でもない、ディベロッパーは絶対に絡まない、市民と行政が一体となって、ある資源を活かしながら、非常に面白く活用し、魅力的な空間にしていきました。

ここは元々公安労働者が住んでいた庶民地区ですので、住宅のスケールも小さいのです。階高も低くため、それが現代のハウズィングにもいいのです。アトリエやギャラリーやレストランが入るのにも、庶民的でなかなかいいのです。そしてここのコートヤードがなかなか良くて、そこを抜けて行くと運河がある訳です。運河沿いはオープンヤードの空間で、日本は衛生管理とかで、外に食事を持ち出しちゃいけないとか、こういうところは河川に近いからなかなか特に公共空間は使わせてくれないとか、雁字搦めなんですが、イタリアは、ヨーロッパは契約社会なのでそれが可能になります。

## 南イタリア　トラーニ

次に南イタリアの紹介をします。ツーリズムという点でも、最近、南イタリアが面白いのです。ツーリズムは、どうしても物価との関係もあるので、安くて楽しめるところ、あるいは安全であるところに流れる傾向があります。そういう意味で一番注目されているのが、南イタリアの踵の辺、プーリア地方です。イギリス人は田園が大好きなので農家を買い、ありがたいことに、人も雇って農業を持続してくれます。そこで外国からの移民の人達が働くという構造もあります。

このように南イタリアが元気なんですが、トラーニという踵の町は、ロマネスクの教会でだけ有名でした。今まではここに大型バスで乗り込んで、パパッと写真を撮って、「はい、さようなら」という感じのツーリズムでした。そしてこの教会は荒廃して、スラム化に近い状態で、見捨てられていました。ところが、この 10 年で変わりました。やっぱり港の周りの歴史的な界隈は面白いと見直されるようになったのです。このように一旦目をつけると、何でもなかったところが、実に生き生きとしていて面白いということがわかってきたのです。19 世紀以後の町も、田舎の町なのになかなかいいんです。でももっと魅力的なのは、やっぱり古い町です。この港には漁港もあり、プレジャーボートが重要です。日本は瀬戸内海を周っていても、プレジャーボートの基地が全然ない。それは先程の石森先生のお話で、日本人は余裕がないのです。もっと余裕をもって、有給休暇を全部とらなきゃいけないと、確かにそう思います。さて、漁師さんもいるということが非常に重要で、いかに農林水産をがんばるかが、ツーリズムのベースとして非常に重要だろうと思います。

ペスカツーリズムというものがあります。日本ではブルーツーリズムというらしいですが、この名前は何か元気が出なくて、ブルーな気持ちになってしまうので、ペスカツーリズムと言って欲しいです。このペスカツーリズムは、スパゲティ・ペスカトーレでおわかりのように、海の漁師の漁業、つまり漁業観光です。これが今、南イタリアで徐々に起こっております。

7 年前くらいに、トラーニでのある光景を見てビックリしました。6 月のウィークエンドだと思いますが、周辺の田舎、小さな町や村に住んでいる人が車やバイクで、そして新市街に住んでいる人達が歩いて、水辺に集まってくるのです。これをツーリズムと呼ぶかという定義が問題すが、こうした人たちの多くがリピーターなのです。こうして集まった人たちがピッツァを食べたり、バーでお酒を飲んだり、深夜までベビーカーを押して楽しんでいるのです。だから、

子供達はまた大きくなったら同じことをするでしょう。こうやって、情操教育というか、“楽しむ水辺”というものが活かされる文化を作っています。

トラーニは、チッタスローの認証を受けて頑張っています。結局チッタスローは、スローフードから始まった地産地消です。地元の食材を活かしてローカルなレシピを発見しながら現代的に楽しむことが、あらゆることに及びました。つまり地産資源というものは、町の中にも、建物にも、空間にも、歴史のエレメントにも、人にも、職人技にも、何でもあるわけで、そういうものを活かしながら、個性のあるローカリゼーションをしっかりやって、文明批評が入っています。

こういうものが、今世界に広がっています。韓国までは来ているそうですが、日本にはまだ来ていません。これをぜひ、ツーリズムと一緒に入れて、活かしていきたいと思っています。

## 新下町としての墨田区

ここから東京の話をします。東京にもアクアツーリズムの色々な可能性があると思います。後で橋爪先生の迫力ある大阪のお話が聞けると思いますが、東京でも迫力のある話は可能です。ただし今日はその周辺の、“何でもないもの”ことの話をします。

今度、墨田区に第二東京タワーが出来ます。墨田区には浅草があり、ここもまさにアクアツーリズム、江戸時代からの中心地です。墨田区は本当に古い町で、古代・中世のお寺や神社がいっぱいあります。隅田川を遡っていくと、ここに地盤が出来ていて、今の江東区は海の下でした。そして江戸時代に近郊農村を背後にひかえながら、向島の下流界につながる武家屋敷のような、今のベースが出来ていきました。このように近世と日本の周辺の遊び場、観光とが重なった非常に面白い土地です。

隅田川の東岸は、これからのアクアツーリズムになり得ると思っています。ここは信じられないくらい古い町で、浅草寺よりも古い、つまり江戸城の周りよりも古い場所です。そういうことを意外と気がついていない。川の周りや玉ノ井には回遊性もあるはずで、両国には江戸文化が花開いていました。

もう一つ重要なのが、水のネットワーク、水路・川・掘割を使って近代産業が発展し、職人技から先端技術が集約されているということです。フランスでのエコツーリズムの定義のひとつとして、産業化遺産・工業化遺産を自然とともに活用することが挙げられます。そういう意味からすると、墨田区は、非常に可能性がある。現在小さな街角博物館のように、小さな職人さんの工房とかアトリエを墨田区がサポートして、ネットワーク化しようとしています。そういう要素と花街とか名所とか観光地、それを舟運で巡る楽しさ。これらをリンクして、エコツーリズム、エコミュージアムを作ろうとしています。

関東大震災で、この辺りは壊滅的な打撃を受けるのですが、その後今度はモダンな都市の水の空間ができました。墨田区役所から眺めると、一見何でもなく、普通に見える町だけれども、そこに価

値のあるものがいっぱい眠っているとまずは考えたいです。

ビオトープも出来ていて、かっこいい水上バスも走っていて、現代と過去が対話するような町の要素を持っていて、隅田川には震災復興橋梁がいっぱいかかっている。そして北十軒川、旧那珂川、小名木川、横十軒川のように、本当に多くの掘割が巡っています。向島百花園を日本で最初のビオトープという人がいますし、最近では横十軒川にもビオトープができています。ここには絶滅種といわれたトンボが水路を上ってくるそうです。だから、水路が復活すれば、自然観察もできるようになります。こうして少しずつ復活しています。

江戸時代に描かれた鳥瞰図がありますが、新東京タワーができると、450m の展望台から、現在の東京を同じアングルで見られるようになります。これはなかなかスリリングで面白い。しかも足元には江戸のエコシステム、台地から秩父、多摩から水がずっと来て東京を巡って、武蔵野台地を巡って隅田川から東京湾に流れる水路がいっぱいある。江戸城もその一角にある。この江戸の流れが全部見える。そしてそれに関係するエコ的なミュージアム、「環境ふれあい館」を作ろうと、皆で計画を練っているところです。

「環境ふれあい館」は、日建設計が実施設計をすることになる、基本構造を我々がまとめました。今は屋上緑化が当たり前になってきましたが、この建物は雨水を全部受けて循環させ、それを見せる構造になっています。墨田区には、“ドクター・雨水”の村瀬誠さんというスーパースターがいまして、彼がこの企画を考えました。それと同時に、育てた野菜を収穫して、それを皆で食べる。そこに寝そべって、高さ 650m の東京タワーを眺める。そしてここに舟運を復活させる。「環境ふれあい館」に舟運のステーションが出来るので、ぐるぐる回っていく。

このように色々な種類の水辺があり、土地利用があり、風景があり、閘門も 2 つある。ここには眠っている資源が無尽蔵にあるので、エコツーリズムの一角にしよう。自転車も入れよう。歩きもしようということもやっています。

## 日野の都市と風景を読む

最後に日野で我々の法政大学のグループが関わって、この 5 年間、エコミュージアム活動をやっています。日野には台地があって、丘陵地があって、淺川があって、旧跡もあります。そしてここには湧き水がいっぱい湧く。それらをプロットしていきますと、地形に応じて古代から近世に人が住んできた姿が見えてきます。近世、平野に用水路をいっぱい引いて人

が住んで、集落が出来てきたのです。このように用水路には注目してきたのですが、集落とか民家とか畑が作り出すカルチュラル・ランドスケープ、先程のトスカーナのようなものに皆目が向いていなかったのです。ですので、神社の外線の緑地とか、神社の配置とか、そういうものを全部見て歩ける、歴史とエコロジーが一緒になった地域を徘徊できる発想を取り入れてもいいと思います。今農業が厳しく、農地を遺産相続の際に手放してしまう。区画整理というかたちで真っ直ぐな道路にして、宅地分譲にしてしまう。しかし最近では人口減少のために、宅地にしても売れませんので、農地をキープしながら、用水路を別なかたちで利用しながらエコツーリズムに結びつける。あるいは環境教育として、地産地消でおいしいものを洒落た場所で食べる。そういう素材を本当に活かせば、日野は都心から 30km にあるので、大きな可能性があると思っています。

すぐ近くの国立にも同じようにいい場所があります。国立というと、駅前の学園都市ばかり考えますが、20 分歩くと素敵な田園風景に行き当たります。ここにも平安時代の神社、ここも古い城館。そして鎌倉時代のお寺、外線にあって用水路が巡っています。これらを結びつけて、水と緑の回廊にして行こうということを、我々は提案していまして、地域づくりであり、これがアクアツーリズムにつながる。そのための新しいインフラづくりをやっていく必要があると思っております。

どうもありがとうございました。